一色いろはの恋の歯車は再び回り始める

カイリュー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一色いろはが大学生2年生。比企ヶ谷が大学3年生になった時のお話です。八色ものです。

目次

#1 再会 ―― 1
#2 約束 ―― 5

#1　再会

私は「本物」を知ってしまったあの日からずっと「本物」を追い続けいる。それは未だに手に入ってはいない。「比企ヶ谷八幡」目が腐っていて一般論でいえば間違いなく残念な部類に入るだろう。でも私はそんな先輩が好きになってしまった。先輩方が卒業したあの日に私は初めて先輩に恋をしていると気づいた。しかし思いすら伝えることも出来ないまま未だに再会できていない。そんななか私はまだ先輩を諦めてはいない。私の名前は一色いろはでいま大学2年生。前のようなあざとい仮面をかぶった態度をしなくなったおかげか同性の友達も増えて充実はしている。しかし何かが足りないと思う。「本物」これを手に入れるにはどうすれば良いのか答えを見つけられないまま私は大学2年の始業式を、迎えた。しかし始業式のこの日私の恋の歯車は再び回り始めたのだった。

始業式が終わったあと、私は友達と一緒に夜ご飯を食べに行った。まだ２０歳にはなっていないのでお茶やジュースで我慢していた。お店の外で待っていると他の大学生っぽい人達が声をかけてきた。

大学生「いまから俺達と一緒に飲まねぇ？俺らが奢ってやるかさー」
ちょっと柄の悪い人だった。明らかにナンパだとわかったので
一色「結構です。いま友達といるんで。」
友達も同じく「遠慮しときます。」といっている。しかしその人達はしつこく私達を誘ってきた。
大学生「一緒に飲もうぜぇ。絶対楽しいからさー。」
私達はどうしようかと困っていると、大学生らしい人が来てその後ろには警官がいた。大学生達は警官を見るとすぐに逃げて行った。
私達「ありがとうございます。」
とスーツの男性と警官にお礼を言った。
警官「いえ、大丈夫でしたか？」
私達「はい。」
さっきの大学生にもお礼を言いたいと思い回りを見渡すと自販機の前にいた。私は追いかけて
一色「さっきはありがとうございました。」
大学生「あっはい。」
その人は少し戸惑いながらそういった。しかしその顔を見た瞬間私は驚いた。大学

生は先輩だったのだ。あの腐った目はまちがいなかった。
一色「もしかして先輩ですか？」
比企ヶ谷「人違いじゃないでしょうか。」
明らかに私と目を合わそうとしない。私は先輩か確かめるためボソッと「本物」と呟いた。先輩は急に慌てだしたので
一色「やっぱり先輩じゃないですかぁ。お久しぶりです。」
比企ヶ谷「あーばれちゃったな。それじゃ」
先輩はすぐに逃げようとしたので私は先輩に抱きついて
一色「逃げないでくださいよぉ。」
上目遣いで訴えた。先輩は高校の時と同じようにキョドっていた。
比企ヶ谷「わかったよ。で、何の用？」
一色「久しぶりにあった後輩にひどくないですかぁ？」
比企ヶ谷「こんなとこで後輩にあうなんてなんて不幸な日だよ」
一色「まぁここで話すのもって感じなんで夜ご飯一緒にどうですか？」
「いや…」と先輩が言いかけたところで「本物」と呟くと「一緒に行くか」とすぐに言うことを聞いてくれた。私は友達にごめん知り合いにあったから今日パスでとメールをすると先輩と居酒屋に向かった。

4　＃1　　再会

#2　約束

私と先輩は居酒屋へ向かいながら私が先輩のことを聞いて先輩がそれに対して答えるそんな会話をしていた。大学でもボッチという事や、どこの大学へ通っているかなどいろんなことをきいた。

一色「せんぱいって彼女いるんですぁ？」

比企ヶ谷「いると思うか？」

一色「いませんよねぇ？」

比企ヶ谷「いるわけないよな。いたらボッチとか言わないからな」

先輩には彼女がいない。さりげなく聞いてみたが先輩には彼女がいなくてとても嬉しくおもった。しかし雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩とはどうなったのか。しかしそのことはタブーな気がして聞けなかった。

一色「せんぱいってこの辺に住んでるんですか？」

比企ヶ谷「前のアパートが色々あって住めなくなってな3月に引っ越したんだよ」

一色「私もこの辺に住んでるんですよぉ。せんぱいって連絡先高校から変えたり

してますか？」

比企ヶ谷「いや、変えてないけど」

「よかったぁ」ボソッと呟くと先輩は「ん？なに？」と難聴系主人公のように聞いてくる。

一色「ふふっ、なんでもないですよぉ」

比企ヶ谷「着いたぞ」

先輩に連れてきてもらった場所は居酒屋かと思っていたらイタリアンのお店だった。

比企ヶ谷「一色まだ未成年だろ？酒飲めないなら居酒屋は嫌かと思ってな。」

一色「確かに未成年ですけどなんで知ってるんですか？」

比企ヶ谷「一色の誕生日って確か４月１６日だろ？」

先輩は私の誕生日を覚えくれていた。これほど嬉しいことはない。自分でも顔に出ちゃってるのがわかる。

一色「じゃあ４月１６日の予定空けといてくださいね　どーせ暇ですよね??」

比企ヶ谷「拒否権は…「ありません！」

先輩には強引に行かないと絶対に逃げられてしまうと思い強めに言ってみる。その結果誕生日にデートできるのだからこれほどいいことはないだろう。

比企ヶ谷「てか、俺なんかといるより彼氏とか友達に誕生日を祝ってもらえ」

一色「彼氏なんていたら先輩を誘いませんよぉ？」

比企ヶ谷「あざとい」
一色「なんかその言葉久しぶりに聞いた気がします」
比企ヶ谷「俺も久しぶりに言った気がするわ」
私と先輩は夕食を済ませてあと、もっと遊びたいといったら明日は一限があるから無理と言われ、その代わり家まで送って行ってもらうことになりました。
比企ヶ谷「そーいや、さっきもナンパされてたけどこーいうこと多いのか」
一色「え？なんですか？彼女を心配する彼氏面ですか？そーいうのはきちんと段階を踏んでお付き合いをしてからにしてください。ごめんなさい。」
高校の時のように私は先輩を振ったつもりだったが実は振っていないことに気づいたが先輩はそれにも気づかずに「またそれかぁ」なんて言っている。くだらない話をしている内に私のアパートに着いた。
一色「ここが、私のアパートです。」
比企ヶ谷「マジで、俺のアパートから徒歩１０分じゃん」
一色「じゃあこれからもたくさん遊べますね　今日はありがとうございました。連絡しますけど４月１６日忘れないでくださいね。それではおやすみなさい。」
比企ヶ谷「おう、それじゃあな」